

# Benesse® ■■ 新入生レポート ■■

ベネッセコーポレーションの「大学生基礎力調査Ⅰ」は、全国で年間約9万人の受検者数を誇る、国内最大の「新入生総合アセスメント」です。

2011年度入学者データを分析した結果から、全国データをもとに今年の新入生にはどのような特徴や課題があるかをご報告します。

※ 2007年度、2009年度、2011年度で受検のある同一の大学・学部のみ抽出して算出

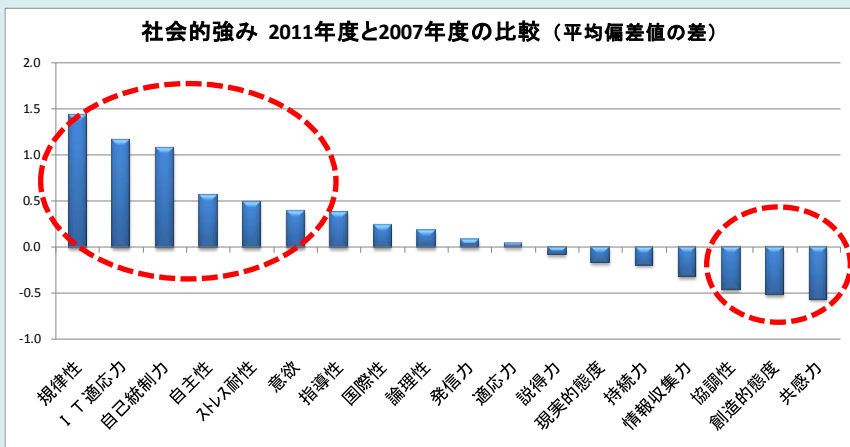
## 一新入生の傾向の変化一

基礎学力は、分野別得点では大きな変化は見られないが、設問別に見ると、日本語理解と英語運用で、語彙、文法などの難易度の低い問題で正答率上昇が見られる。2011年度新入生は、学習指導要領が「ゆとり教育」から「確かな学力」路線に転換した2003年当時、小学校5年生であった。基礎的・基本的な事項の定着率は上昇している可能性がある。

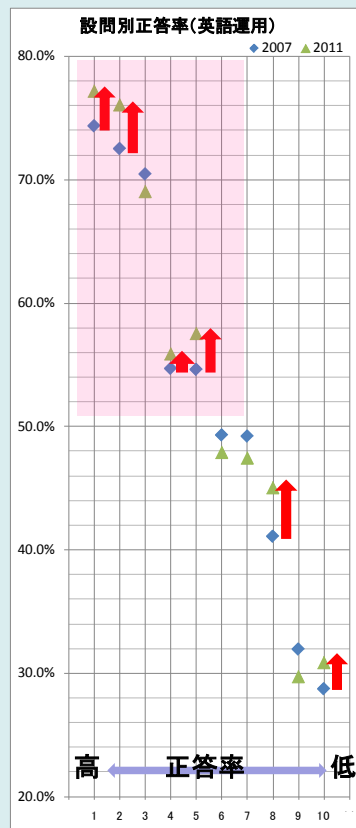
社会的強みを2011年度入学生と2007年度入学生で比較すると、「規律性」「自己統制力」「自主性」「ストレス耐性」「意欲」といった我慢強さ、意欲に関する偏差値が上昇している。一方、「共感性」「協調性」など人と積極的に関わる力は下降している。まじめで素直だが、他者との関係に踏み込もうとしない傾向がうかがえる。

### 基礎学力 分野別平均得点

	2007 (n=38,881)	2009 (n=37,879)	2011 (n=42,984)
日本語理解(40点満点)	25.26	25.69	25.73
英語運用(40点満点)	21.08	21.11	21.47
判断推理(20点満点)	11.08	11.10	11.07



※本文中、「差がある」としているものは、全て0.1%水準で統計的有意差有り



## 「大学生基礎力調査Ⅰ」とは…

1997年のリリース以来、のべ約87万人の大学生に受検していただいている総合アセスメントです。検査項目は「基礎学力(英語運用・日本語理解・判断推理)」「社会的強み」「進路に対する意識」「職業への興味」と幅広くカバーしています。また、「入学理由」「大学生活で力を入れたいこと」「高校時代の学習習慣」「進路への不安」などアンケート項目も充実し、さまざまな活用が可能な調査となっています。

大学1年生には、大学生活を有意義に過ごしてもらうために、入学時点の自分の状況を把握したうえで、目標設定や行動の方向性を考えてもらう材料として活用いただいています。

また大学教職員の皆さまには、入学試験だけでは測れない学生の特徴を把握していただき、その後の教育、指導の基礎データとして、大学の自己評価ツールとしてご好評いただいています。

検査項目の一つである「社会的強み」につきましては、経済産業省から発表された「社会人基礎力」の能力要素と類似しており、基礎学力とは異なる“第2の評価基準”として注目されています。

同じ大学、学部に入学者でも、志望度と入試区分によって学びへの意欲や学習習慣、入学後の適応、進路意識など多くの項目で差が生じている。どのようなプロフィールの学生がどのくらいの割合で在籍しているのかを把握することは、教育プログラム検討のための有益な情報となるだろう。

ここでは、志望度や入試区分によって、どのような差が生じているのか、全国データをもとに紹介する。

■本報告で使用するデータ

- ・受検校 : 87大学
- ・受検者数 : 89,015人

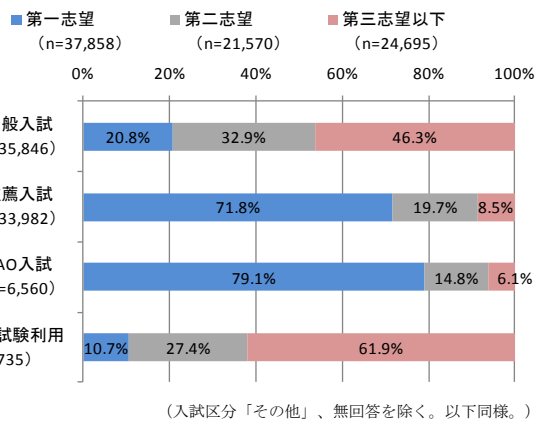
※2011年4月1日～5月13日処理分まで

# 1 入試区分・志望度・基礎学力 ～大学志望度と基礎学力は逆相関～

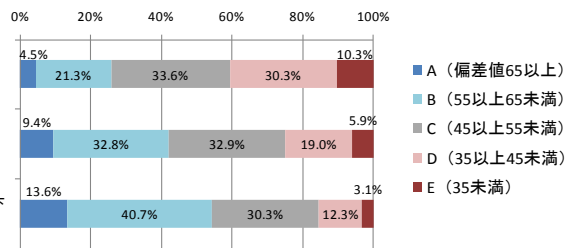
大学志望度の分布は、入試区分により大きな違いがある【図1】。センター試験利用者・一般入試による入学者は第三志望以下の割合が高く(61.9%、46.3%)、AO入試・推薦入試による入学者は、第一志望である割合が高い(79.1%、71.8%)。

大学志望度別に基礎学力を比較すると、第三志望以下の学生(大部分が一般入試・センター試験利用者)は、第一志望・第二志望の学生と比較して高い学力を有していることが分かる【図2】。

【図1】 入試区分別 大学志望度



【図2】 大学志望度別 基礎学力(総合)段階値



※「基礎学力」偏差値は、基準母集団の平均点と標準偏差より算出しています。図2、図7は「基礎学力」受検者のみを抽出しているため、志望度別・入試区分別の人数が図1と図2、図7で異なっています。

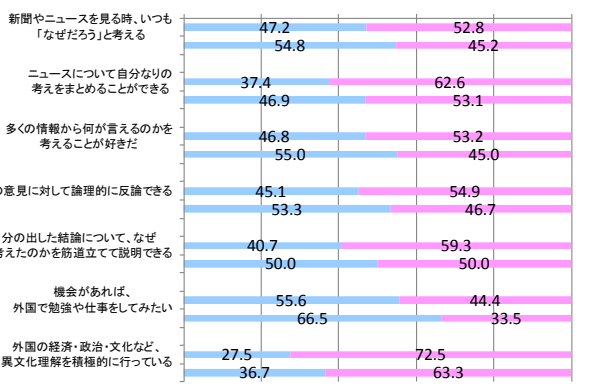
# 2 第三志望以下の学生の懸念点 ～優秀な学生が多いが、大学生活に不安あり～

大学志望度が第三志望以下の学生は、情報分析や論理的思考、国際性に関する設問項目で良好な傾向を示しており、大学での学びとの親和性がうかがえる【図3】。一方で、「友人ができるかどうか不安」「希望する進路に進めるか不安」など、大学生活や進路への不安感が強い傾向にある【図4】。

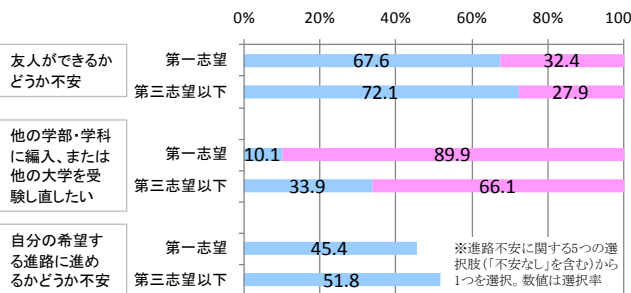
第三志望以下の学生は、第一志望の学生と比べて卒業後の希望進路で「大学院進学」を選択する比率が際立って高く【図5】、これは学力や学習能力の高さだけではない、「再チャレンジ」志向の表れである可能性がある。このような、能力・意欲は高いが将来への不安を持ち、友人関係を含めて大学生活に馴染めないと感じる学生に対し、レベルに合ったプログラムの提供や、意識の高い学生と交流できる場の設定などが求められる。

大学志望度とは別に、学部・学科志望度についても聞いている。学部・学科志望度が第三志望以下の学生は、「学びたいことが見つかるかどうか不安」という無目的型の不安・悩みが多くなっている【図6】。学部・学科選択でミスマッチを起こしている学生に対しては、ガイダンス機能の強化や転学部・転学科枠の設定など、別途対策が必要となるだろう。

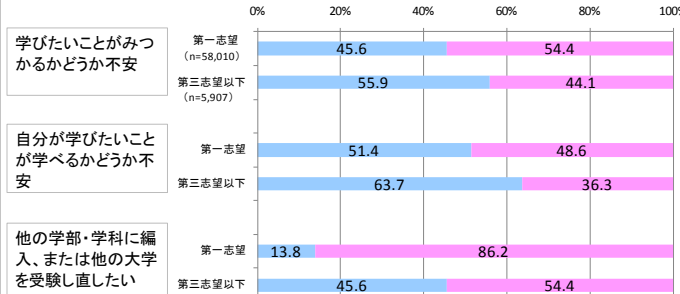
【図3】 上段: 大学第一志望 下段: 大学第三志望以下



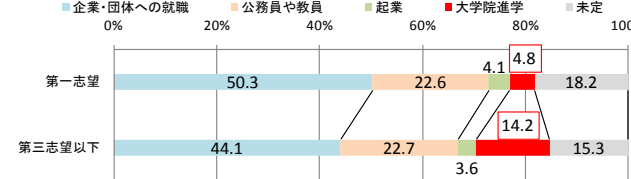
【図4】 大学志望度別 大学生活への不安 (肯定・否定回答率 %)



【図6】 学部・学科志望度別 大学生活への不安 (肯定・否定回答率 %)



【図5】 大学志望度別 卒業後の進路 (選択率 %)

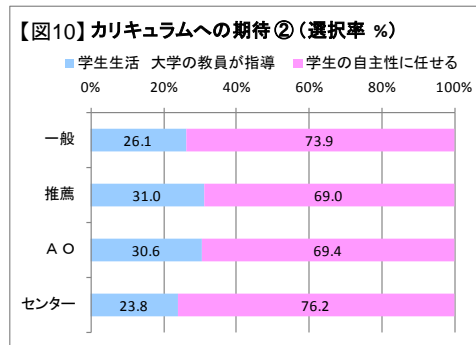
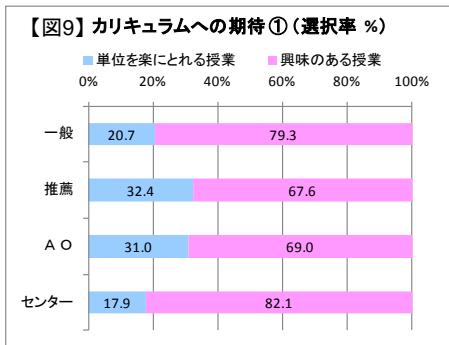
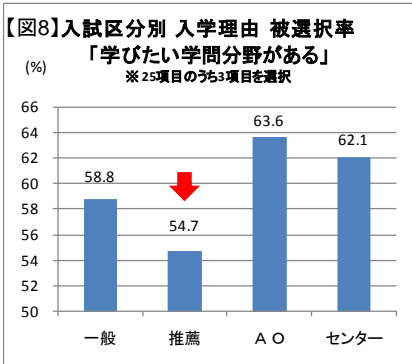
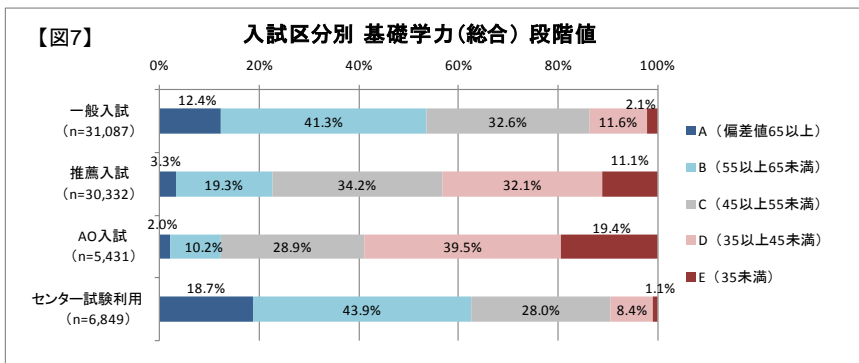


### 3 推薦入試による入学者の課題 ～学びへの意識を高め、自立を促す～

推薦・AO入試で入学した学生は、低学力層の割合が高くなっている【図7】。ただし、AO入試の学生は入学理由として「学びたい学問分野がある」を選択した割合が63.6%と相対的に高いのに対して、推薦入試の学生は54.7%となっており、入試区分の中で最低となっている【図8】。

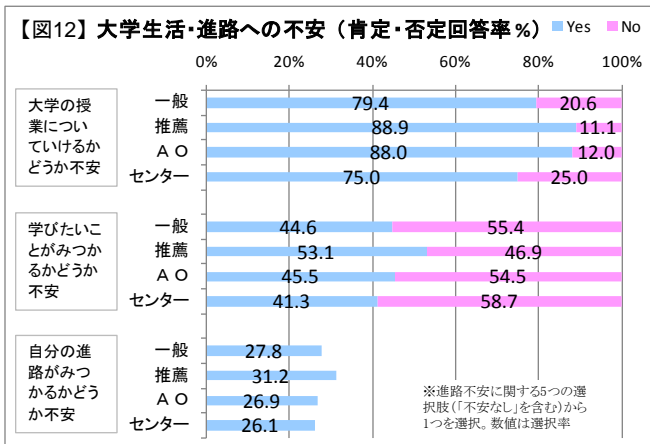
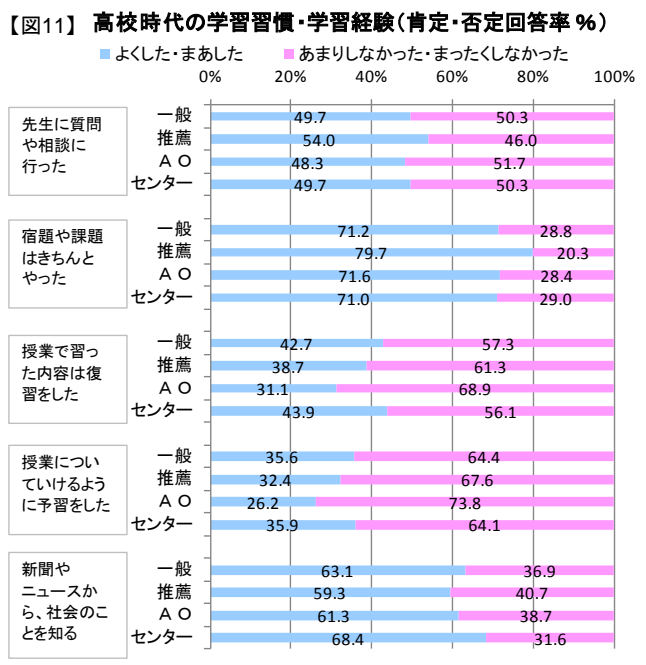
大学のカリキュラムへの期待を見ると、推薦・AO入試による入学者は「単位を楽に取れる授業」【図9】を希望する割合が

高い一方、「学生生活については、大学の教員が指導する方がよい」【図10】と回答する割合も相対的に高くなっている。「楽をしたい」が「教員にかまってほしい」という矛盾した（甘えた、とも言える）意識が見うけられる。学びに向かわせつつ、自立性・自律性を身につけさせることが求められる。



学習習慣・学習経験についても、同様の傾向がうかがえる【図11】。推薦入試を経て入学した学生は、「先生に質問・相談に行く」頻度が高く、「宿題はきちんとやる」など、一見すると積極的でまじめな学生に映る。しかし、「授業で習った内容は復習をした」「授業についていけるように予習をした」「新聞やニュースから、社会のことを知る」に「よくした・まあした」と回答している割合は低く、指示された学習以外のことに自発的に取り組む態度に乏しいことが予想される。まずは「学び方を学ぶ」ところから始める必要があるかもしれない。

大学生活・進路への不安にも、学力の低さや「とりあえず進学」したことが反映されており、「授業についていけるかどうか不安」「学びたいことがみつかるかどうか不安」「自分の進路がみつかるかどうか不安」の肯定回答率が高くなっている【図12】。



今回のレポートでは、学生のプロフィールによって、「学び」への親和性は高いが「大学」への不適応が懸念される層、「大学」への適応は高いが「学び」への意識が低い層があることを報告した。これは、大学によっても事情は異なるかもしれない。大学の教育効果と学生満足度の向上には、それぞれへの適切な対応が必要となるだろう。

※本文中、「差がある」としているものは、全て0.1%水準で統計的有意差有り。